大川ばた

長谷川時雨

青空文庫

大川は、東京下町を兩斷して、まつすぐに流れてゐる。

その古の相貌は、まことに美しい潮入り川で、蘆荻ところどころ、むさしの側は、丘は鬱蒼として、下總野の、かつしかあがたは、雲手の水に水郷となり、牛島の御牧には牛馬が放牧されてゐた。北には筑波が朝紫に、西に富士はくれなゐの夕照にくつきりと白く、東南に安房上總は青黛のやうに、海となる空のはてに淡い。

このころこそ全くの隅田川で、

名にしおはばいざこと問はん都鳥我思ふ人はありやなしやと。

と、東下りの業平さんに涙させた——もつとも、その古跡は、埼玉の古利根川だともいふが——白き鳥の、喙と足の赤いのが、いう〳〵と魚をくつて、むつれてゐたのだ。してまた、白い鳥がくつきりと見えるほど、水は澄んで青かつたのだ。

お江戸となつた元祿のころには、江東にばせをが住んでゐて、大川に、新大橋がかかると、

ありがたやいただいてふむ橋の霜。

と吟じ、五十年ばかりたつと、賀茂の眞淵うしの縣居は、こつちがしの濱町、大川の浦に新築され、庭を野邊、畑につくり、名ある國學者を招いて十三夜の月をめでてゐる。

その時分の大川端、中洲の三叉は月の名所で、これまた泥川の濁流ではない。

大川端といふ名が、ある種の魅惑をもつてきこえてきたのは、吉原が淺草千束村に移り、そ

の交通路とこの川筋がなつたので、特殊の文化を兩岸に生んで來てからで、辰巳（深川）お旅辨天や松井町（本所）の賑はひと、辰巳文學（といつてよければ）香夢洲（むかふじま）文學と切りはなされない。やがて、日本橋人形町の芝居小屋が淺草猿若町に移轉すると、吉原、觀音樣地内、芝居茶屋、舟宿、柳橋、兩國の盛り場と石濱、山の宿側（しゆく）は流れて來て、

おゝ、あの舟でゆくのは、田之助ぢやないか。

といふふうに大川筋は、遊山、氣保養の本花道となり、兩河岸は大名下邸（しもやしき）の土塀と、いきな住居の手すりと、お茶屋といふ、江戸錦繪、浮世繪氣分横溢となつた。

そんなことをいつてゐたらば限りがないが、それらの脈をひいた新時代的のものをいへば、故小山内薫さんの小説「大川端」が、明治の末から大正のはじめにかかる大川端情緒を、名殘りなく現はしてゐる。

あの小説は、中洲眞砂座に立籠つて、近松研究をしてゐたところの新派劇の伊井蓉峰一座と、濱町のお宅の木場（きば）の旦那、お妾さん、柳橋、芳町の藝者、歌舞伎役者や、幇間たちといふ、舊文明の遺産を中心にして、近代劇文學の尖端人である氏自身が、その中に溺れてゐるのを書いた、新しい時代へかかる古い型の打止めといつてもよいであらう。

この間、哥澤節を日本的ソプラノ・テノールと紹介したが「夕暮」を唄ふときいて、およしなさい、もはや眺め見渡す隅田川の實感は、震災後の若人には來ない。大川ばた全體が燒禿げた待乳山（まつち）同然だと止めた。

大角力も花火も、九ツの鐵橋と共に、昔の甘い夢はさそはない。あの濁流の盛上る大川こそ新興首都が吐き出す力の流れだ。あれが、昔のやうに澄んで流れる設備が出來るときこそ、大アジアの首都東京が完備する時なのだ。

――昭和十三年七月九日・東京日日新聞――

青空文庫情報

底本：「随筆　きもの」實業之日本社
1939（昭和14）年10月20日発行
1939（昭和14）年11月7日5版
初出：「東京日日新聞」
1938（昭和13）年7月9日
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2009年1月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大川ばた

長谷川時雨

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/